

土台が変化する時代に

農水省は2021年5月にみどりの食料システム戦略（以下「みどり戦略」）を決定した。現場への浸透度は低いのが実情とはいえ、名前からいはいは聞いたことがあるという人が増えてきているのは確かだ。

気候変動対策をメインに、生産力向上と持続性の両立を目指して、2050年までに、化学農薬の50%減、化学肥料の30%減、有機農業面積割合25%（100万ヘクタール）を実現する目標を掲げる。今、農業や農産物を取り巻く世界は土台から変化しつつあり、みどり戦略もその一部で、この流れは次第に太くなって、世界的な潮流を形成しようとしているように受け止められる。スマート農業やAI化、ゲノム編集等、生産性・効率性・大規模化を基本とする近代化の動きが加速する一方で、土中での微生物の働きに対する注目が高まるとともに、不耕起やカバークropp（作物で被覆し、土壌を露出させない

ようにすること）への関心も高まるなど、農業の原点・原理をあらためて科学的に考察することよって、近代化の弊害を克服し、さらには近代化を超えた世界を展望しようとする試みが進展しつつあるようにも感じている。

くさんの人たちが満杯のようだ。矢野さんは造園をしながら、その「日常の小さな造園現場を通して見えてきた開発大地の問題点」に対処する中で、「環境再生の手法を確立し『大地の再生』講座を全国で展開しながら普及と指導を続



「杜人」が訴えるもの

こうした根底的な動きを代表する一つが「大地の再生」の取り組みである。「杜人／環境再生医 矢野智徳の挑戦」なる映画が、各地で自主上映されているが、どこもた

けて「おられる。矢野さんによれば「本来の大地とは、雨のときも、晴天のときも、地上と地下の空気と水が浸透・循環し、清々するような対流が補償されたもの」であったはずが、「今や沖繩から北海道まで津々浦々に、

清流域を失い、泥水汚染の流れに変貌」してしまった。その原因は、こうした社会問題・環境問題に直面しながらも、「日常的なリスクを避けようとする、安全・安心の世界を追い求め続ける意識が、このシグナルに気づく（受け止める）芽を摘んでできてしまったから」というのが見立てである。このため「いまの日常的な切迫する環境（社会）問題を、子どもたちの目線に立ち返って見つめ直し、今すぐに取り組める足元からの小さな環境改善の「気持ちと術」、すなわち「小さな移植ゴテとノコガマ一本からの取り組みを呼び掛ける。

「自然の恵み」をいただく

別途、You Tubeの中で矢野さんは、環境再生の取り組みに対し、「生態系は10倍のエネルギーで返してくれる」と述べておられる。この自然の持つ桁違いのエネルギーを引き出し、自然の恵みをいただいでいくことが、持続性の高い農業とともに食料安全保障をも可能にしてくれるのではないかと。